香小研算数部会夏季研修会　　第 2 学年討議会　　討議記録

「いちばんおおいのは　どれだろう」

1　提案の主張点

(1)教材について

教材については，量感覚の違いや様々な数え方を体験させるために，いろいろな種類の材料を数える活動を選択した。

材料は，牛乳の栓・クリップ・ストローなど児童が収集したものを 16 種類準備し，28 人児童が 2 人組で協力して学び合いながら数えれるようにした。これらの素材は，単元を通して活用でき，児童の意識がつながっていくように単元を構成した。

(2)算数的活動の実際と考察

16 種類の材料を同じ容器に入れ，数え終わっても最初の量が分かるように写真を掲示した

また，数を予想する活動も取り入れ，量感覚を養うことができると考えた。児童は予想するとき，数ではなくかさで判断していることが分かった。また，掲示した写真は数え終わって振り返るときも役立った。

多様な数え方を表出させ，数え方を交流して個々のよさを発見させるために，教師が意図的に混乱を与え,思考を深めさせた。種類が多岐にわたっているため，いろいろな方法で 10 のかたまりを作って数えることに気づいた。

また，数えるだけに満足せず，全員がすべての材料を数えられるような並べ方や表記の仕方を工夫させることによって，100 のかたまりを作る良さに気づかせた。

命数法から記数法で表現する活動を取り入れることで，数の構成の理解を深めさせた。

次に，16 種類の数の大きさ比べをさせた。際,位がよく分かるように縦線を入れたワークシトに数字を書かせ，数字ごとに切り離して比較しやすくさせた。位の数を意識させることで，自力解決ができた。

2　提案に対する意見

Q：単元構成が工夫されている。もし意図したことを子どもが反応しなかった場合，流れが変わったのではないか。

A：「友だちに分かるように」というので，流れが変わった。何を数えるか，子どもたちに選ばせたので，意欲的に取り組めた。全ての素材は，単元終了まで廊下に掲示しておいたところ，休み時間も興味をもって見ていた。

Q：ペアの組み方は?　　A：となりの子

Q：評価規準は何のために，何を参考にして作ったか？

A：絶対評価が目的だが，単元ごと，また１時間ごとに振り返って評価し，支援の仕方を考える必要がある。指導要領や指導書・参考図書を元に，単元ごとに作った。

Q：２年生として，交流でどこまで望んでいるか？

A：２年生は１つ１つ助言しなければ，待っていても何も生まれない。話すときは，相手の方へ向き，ゆっくりはっきり話す。途中でみんなを見ること。「どうですか？」とみんなの気持ちを聞く。聞くときは,「～がよかった。」とか，自分の考えと同じ所はどこか明らかにする。友だちの表現を見て，代わって説明する活動も取り入れた。

・327 を 300207 と書く児童が１人もいないのがすごい。子どもたちが誤答しなかったので，あえて誤答を出した。

・課題意識の継続を図るために，教師にとって無駄と思えることも，子どもの意識を尊重して体験させることが大切である。

2　指導者より

・　本単元の本質はかたまり（束）を作ることである。線で囲むのはまだ中途半端。数えて輪ゴムなどで束を作ることが位の概念に結び付く。100 の束のよさを感じるためには 700 ぐらいいるが,実態からすると,300 が妥当。

・　かたまりをつくるよさに気づくことから，千のかたまり，一万のかたまりへと発展して考えられる子を育てるべき。

・　学び合いのために，伝え合う力を日頃からきたえておく必要がある。中学年になると，きらいな子だから意見に反対するということも見られる。

・　評価規準については，関心意欲や考え方を授業中に活用する。総括はどこでするか，前もって決めておく。できない子にどう手立てをするかを知るために評価する。